

圧倒的な白のボリューム

大木潤子『私の知らない歌』断想

平居 謙

上

大木潤子『私の知らない歌』（思潮社）を手にしたときそのボリュームに驚いた。そして、中を開いたとき今度は空白のボリュームに再度驚くことになった。

詩集の作りとしては前詩集『石の花』と似通っている。文字が置かれているのは左ページだけで、右ページが白であること。それに加えて、各ページに置かれている詩句が極めて少ない。しかし今回の詩集はさらにパワーアップしている。圧倒的という他に言葉がない。余白、と書いたが、あ、「余」ではないのだと思う。「余」ではなく、「白」そのものが迫ってくる。白のボリュームが僕を魅了する。

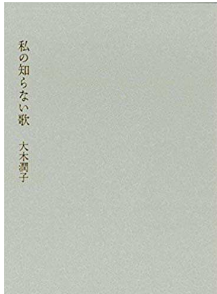
「白いところなんかなくて、もっと文字を詰めて薄くしたらいいのに」という人があるだろうと想像する。

しかし「もっと詰めて…」という理屈は、「スカイツリーは5階建てくらいでいいじゃないか」とか、「大仏が大きすぎるから、もう少し経済的なことを考えて、1メートルくらいにしたら？」とか。僕の住む関西で言えば「太陽の塔も顔が前にも後ろにも3つもあるのは変だから、ひとつにしたらどうだろう」とか、「吉本新喜劇のしつこく繰り返すギャグは、結局同じリフレインだから1回でいいじゃないの？」というような議論に似てナンセンスである。

この詩集は美術館みたいなもので、その中に入り込むことで初めて作品の与えるものを感知的に捕まえることができるようになっている。あるいは映画館。すっぽりと闇の中に包まれて、外部から遮断されて鑑賞することが、DVDで見る感じと全く異なっていることは誰もが体験していることだ。その意味では、「そのもの」に触れることができるとてもよかったと思える詩集の1冊である。

美術館を回ってゆくと、ふと突然に現れた作品に驚く。僕は、入り口で配布される展示一覧も、大して見ないままに回ってゆくことが多い。それでまた次の展示室に入って、同じようにはおとしたりする。大木潤子の詩集は、構造的にこの感覚を読者に与えてくれることになる。

もっとも、「展示」されている作品が、どうってことのない作品ならば、次の展示室に入った瞬間の衝撃なんて来ない。震撼させられるのは、構造に耐えるだけの作品がそこにあるということである。後半「下」ではその一部を垣間見たい。



下

『私の知らない歌』をばらばらと繰ってゆく。本の大きさに比して感触が柔らかく、文字通りばらばらと頁が動く。この手の動きが快感だ。ところが、突然、「死」という言葉が現れてきてはととする。

「死んだことが わかっていない」 (p29)

「詰めて」配置された詩集だと、この詩句は前後の文脈の中で読まれることになる。この詩集でもそれは可能なわけだ。先に見た展示室に戻ってもう一度油彩画を見直すように、否、それ以上に容易い。頁を戻ればよいのだから。しかし、それはする必要がないことのように思われる。むしろしてはいけない禁則であるかのように囚われて、今眼前にある頁の詩句にだけ目を落とす。

「死んだことが／わかっていない」とは。一体、誰が？「わかる」とは？「わかっていない」とは？どういう状況？詩集に戻ってじっくりと詩脈を確かめればわかるのだが、それができない。容易いと書いたのは理屈上のことで、現実には頁を進めばもう、後戻りできない圧力のよくなものを感じざるを得ない。

死んだ主体そのものが、「死んだことが／わかっていない」のかも知れないと思う。自動車に轢かれた幼い女の子の霊が、自分が死んだことも分からずに出没する交差点が僕の住まいからほど近い吹田の江坂ではよく知られている。少しそんな都市伝説めいたことも想像する。

一方で、自分の大切な人や、飼っていた動物が死んだことを本当は分かっていたがしかし頭のどこかで「死んだことが／わかっていない」と言わざるを得ないという気分のことも思う。

幼い日、飼っていた十姉妹が死んで、近くの空き地に埋める時母は「もう鳥さんとは会えへんのえ」と僕に言った。なぜ哀しみに追い打ちをかけるようなことを言うのか今でも不思議だが、そういう現実の言葉に抵抗するため「死んだことが／わかっていない」と言う気分が生まれることもあるのだと確信する。

同じようふと現れる「風に／乗るときもある」（P31）という言葉や「自分を殺した者を／忘れている」（p35）「沈んでゆく」（p39）といった言葉が好きだ。特に「自分を殺した者を／忘れている」は、「死後の世界に移った存在はこの世の中で辛い仕打ちを受けた（自分を殺した）者のことを忘れる」と言っているような気がして読む。そうだと良いなと思う。

この詩集は、死とか骨とか、そういったものが繰り返し現れる。暗くて重い題材なのだが、そういうものこそ文学の中でしか語りようがないので、それが存在意義なのだなどつくづく感じる。「暗いな」と揶揄する人がいたとすれば、感性が若いのだ。悪い意味において。

はっとした詩句を書き写してみる。「虹の出る空の下で／骨がばらばらに砕けていく／静かな夜の出来事である」（p95）「時間が通る細い道を歩いてゆく」（p139）「ねばねばした時間の管の中を／突起に手をかけ、掴みながら／逆に辿ってゆく」（p149）「生きている時／何の接点もなかったその／骨」（p161）「まるで歌のうような泡、／まるで泡のような歌、／（すぐに消えてゆくのので／書き留めることができない、）」（p231）

今上記のように「詰め」で引用してみたら、「白」が全く失われ勿体ない気分になったので、今度はせめて行を詰めずに引用する。

小さな虫たちの
霊が瞬いて
光の道を
つくる （p237）

塊
もしくは
魂
の
ようなもの
揺れながら、（p275）

死
という空白を
生きていこうとする（p329）

やはり何度も「死」のイメージが繰り返し出て来る。あるいは、僕自身はその言葉に目を奪われているに過ぎないのか？いずれにしても、「死」がこの詩集の中に現れていることには間違いない。

僕は先に、十姉妹を巡る自分自身の体験のことを書いた。そんな昔の、死をめぐる出来事を思い起させるのはそういう主題をこの詩集が持っていて、断片を繰り返し繰り返し読む者に送りつけてくるからなのだろう。

おそらく大木自身の幼いころの体験だと思われる、アメンボを巡る短章がある。子供のころに揺れていた水紋が、何年も後になった今日の前に現れる。

アメンボが動いて
水紋が広がる
幼かった日 池で
アメンボを追っていた
あの時の
水紋が
いま (p 353)

また同じく、ツユムシの葬列に関する以下のような遠い回想にも共通する感覚だろう。

ツユムシの
葬列、
頭を垂れて
親のされこうべを
踏みつけて進む (p445)

時間を遡る感覚がここにある。そう思いながら、詩集『石の花』について少し書いたあと、この詩集を未見のまま（この詩集はそのころまだ編集工房の中で眠っていたのだ）大木の「時間を裏返すシリーズ」について少し記したことを思い出した。そして今、その中間に位置していたこの詩集を読んで、『石の花』—『私の知らない歌』—「時間を裏返すシリーズ」の流が僕の中で初めてつながったのだった。この詩集『私の知らない歌』の中にすでに「時間を裏返す」というキーワードが現れている。

時間と時間の谷間、その
裂け目に爪を入れて裏返
してゆく、出てくるのは
やわらかな赤子の皮膚だ (P367)

そんなことを思いながら、もう一度、この詩集を最初から読み直そうと冒頭の詩句を読むとそこには

箱を
崩す (P9)

とさりげなく書かれている。最初読んだ時には読み飛ばしてしまっていたが、確立された現在という箱を崩すところから、この詩集の彷徨は始まっているのだと気づいた。この詩集に対するとりあえずの最初の読みは、僕の中で固まった。しかし「箱を／崩す」という詩句で始まっている以上、読むたびにこの詩集の様相は異なったものに見えてくるに違いない。